コラムに観察されるくり返しの機能

塩　澤　和　子

1　はじめに

語彙的結束性は，テキストの一般的構造を探るために用いる中心的概念の一つであり，Halliday 学派における結束性の研究は「英国における談話分析研究に大きく影響した」[注1]という。Halliday 学派の語彙的結束性は，「再叙(RE-ITERATION)」と「コロケーション（COLLOCATION)」という「はっきりと異なる2つの側面を内包している」が，2つのタイプの結束性の背後には「語彙的意味の連続性によって結束的効果が達成される」という原理がある[注2]。

この2つの語彙項目の間に観察される繰り返しは，グリースのいう会話を進行させるために必要な協力の4原則からは，障害となる否定的な要因と見なされるものではあるが，しかし牧野成一（1980）が指摘するように，語彙項目間の繰り返しには，冗長性を増すだけとは言い切れない，重要な機能があることは否定できない。

中田智子（1992）は『会話の方策としてのくり返し」で，Jakobson（1960）の言語の6機能の概念に修正を加えて，くり返しの発話機能を次の7種類に分類する。

1 関説的機能：対象を指示する機能。何かを述べたり情報をやりとりしたりするような伝達内容重視のコミュニケーションを助けるはたらき。
2 心情的機能：会話における話者の心情や態度を表現するはたらき。
3 動能的機能：指示や説得のように会話の相手に直接的な影響を与える（与えようとする）はたらきかけに関わる機能。
4 交話的機能：ことばのやりとりによる接触関係を保つ上での機能。
5 詩的機能：音やリズム，ことば遊びのような効果をあげるはたらき。
6 メタ言語的機能：相手の言ったことばの意味を尋ねるなど，言語そのものについて言及する機能。

7 談話構成的機能：談話の構成表示や運営に関わるはたらき。

会話に見られるくり返しの機能は，複数話者間で交互にダイナミックに交わされる談話であるからこそ，観察される機能と言えるのであろう。相手に情報を分かりやすく伝達するために，重要な点を二度三度繰り返して念を押す必要はあるし，相手と関わる中で心情的に気分が高揚したり，不満，憤りなどの感情を爆発させたりする時など，思わず何度も同じことを繰り返してしまうこともある。あるいは「強引な印象を与えないように，ことばつきは控えめにしながらくり返しによってはたらきかけを強めるというのは，説得などでよく用いられる方策である」(282頁）とあるように，依頼，説得，抗議などの目的を達成するため相手に直接働きかける行為では，くり返しが相手に圧力を加えていくこともある。

中田智子（1992）が上げる例を見ると，繰り返しは多様な機能を発揮し会話を進める上で有効な方策となっていることが分かる。

それでは文章の場合はどうであろうか。文章に観察されるくり返しは，談話と同じような機能をもっているのであろうか，それとも文章には文章なりの機能が観察されるのであろうか。文章は一人の書き手がある目的を達成するために言語を媒体に築き上げる言語作品であり，あくまで書き手一人の力によって生み出される一つの独自な世界である。そのため文章は，参加者同士の共同作業によって展開していく談話とは違って，ある一定の方向を目指して話題が展開し，結論へと至る，比較的静的な展開方式をとることが多い。そのため語句の繰り返しも，談話とは異なる機能が観察されるのではないかと考える。

そこで本稿では，この点を確認するため，文章に表れる語句のくり返しの機能を検討することにする。なお，本稿では「文章」を書き言葉，「談話」を話し言葉の意味で用いる。

分析用の資料は次のものを使用する。

読売新聞「編集手帳」(2004年10月１日～10月31日)

ここでコラムを分析用資料として用いる理由を述べておく。コラムは短評とも言われ，時事問題を取り上げ，それに対する批評，評価を行うことを基調とする文章である。コラムの代表格，朝日新聞の天声人語，読売新聞の編集手帳などは，政治，経済，外交問題を始め市井の問題に至るまでを題材としており，

毎回取り上げる問題の概要と批評を中心に600〜700字程度にまとまったものが，朝刊の第一面を飾っている。これらのコラムは全体的に文章構造がしっかりしていて展開方式の把握しやすいものが多い。しかも語句が厳選されているため，特に話題の提示に関わる語句，文相互の連接関係から判断する語句の意味的受け継ぎ，新たな話題を提示する語句，冒頭部と結尾部が対応する語句など，反復の機能を観察する手がかりとなる語句の認定も比較的容易に出来る。そのため反復を観察するには適切な資料と判断した。

なお既に拙稿[注3]で「天声人語」を分析したので，今回は「編集手帳」を使用する。

2　コラムに見るくり返しの機能

佐久間まゆみ（1992）は，対話において観察される接続表現の文脈展開機能を３種12項目に分類（試案）している。

A　話を開始する機能
B　話を展開する機能
　b１話を重ねる機能　b２話を進める機能　b３話を深める機能
　b４話をそらす機能　b５話を戻す機能　b６話をさえぎる機能
　b７話をうながす機能　b８話を変える機能　b９話をはさむ機能
　b10話をまとめる機能
C　話を終了する機能

この接続表現の文脈展開機能を参考に，編集手帳の一ヶ月分の分析を基に，コラムに観察される機能として，次の３種５項目を立てることにする。

A　初出の話題を進める機能
B　話題の展開に関わる機能
　b１話題をまとめ，新たな話題の展開を予告する機能
　b２話題をまとめ，強調する機能
C　話題を終了させる機能
　c１対立の図式を鮮明にして終了させる機能
　c２話題を再確認して終了させる機能

以下，文例を上げながら，考察を進めていく。

2.1　A初出の話題を進める機能

コラムでは，冒頭の一文に提示された語句は，次の2文，3文で同語反復，類義語，対義語，上位語下位語，関連語句などで受け継がれ，反復を繰り返しながら話題を進めていくことが多い。しかし冒頭に初出の語句がコラムの最後まで同語反復などを繰り返す例は稀で（10月23日の「なぜ」，10月24日の「ゴミ箱」の2例がある），大半は順次話題を切り替えながら展開する方法が取られている。話題の切り替えには，文章・談話では一般に「ところで，さて，それでは，ともあれ，では」などの転換型の接続表現を使うことが多いが，コラムでは紙幅の関係からか，接続表現の使用は皆無に近い[注4]。そのため，先行文の語句と直接反復関係をもたない新出語句を登場させることで話題を切り替えていることが観察される。

そこで初出の語句がどのようにくり返されて話題を進めていくのか，冒頭部，展開部，結尾部という文章の流れを考慮しながら，語句のくり返しに観察される話題を進める機能について考察していくことにする。

例1　10月31日

①小林一茶にキノコを詠んだ俳句がある。②「うつくしやあら美しや毒きのこ」。③色の鮮やかなものほど毒性が強いのではと昔から警戒されてきた◆④山梨県にキノコ狩りに出かけた。⑤一時間ほどでスーパーの袋いっぱい採れた。⑥地元の人に鑑定してもらうと，食べられるのは一割にも満たなかった。⑦それでも，汁物にして秋の味覚を楽しんだ◆⑧森林総合研究所きのこ研究室の根田仁・主任研究官によると，日本のキノコは名前が分かっているものだけで約三千種に上っている。⑨キノコの宝庫だ◆⑩根田さんは「色が地味でも毒性が強いものもある。色では判別できない」という。⑪毒ではない食用スギヒラタケで騒動が起きている。⑫食べたことが死亡した原因かどうか，疑われている。⑬十分な知識と用心が欠かせない◆⑭毒といえば，多くの日本企業が近い将来，ポイズン・ピル（毒薬）を導入するだろう。⑮株式買い占めに対し，味方の株主に新株が発行され，買収者の買い占め比率を引き下げる。⑯乗っ取りを防ぐ対抗策だ。⑰経済産業省が導入を検討している◆⑱日本企業の株式は時価総額が低いことから，買収の対象になりやすい。

⑲高い技術力を誇る企業が多い。⑳外国企業が虎視眈々（こしたんたん）と狙っているとか。㉑〈美しい日本企業には毒がある〉と，日本の社長さんは一茶流に喧伝（けんでん）してみてはどうだろう。

本コラムは，一茶の毒キノコを詠んだ句で始まり，筆者が体験したキノコ狩り，キノコの毒性判別に関わる根田研究員の談話紹介，食用スギヒラタケ騒動，ポイズン・ピル（毒薬）導入の動きなどと，話題が順次展開し，結尾部は一茶の句をパロディ化して締め括っている。この話題の流れを語句の反復を手がかりに観察すると，新出語句が出現するところで話題が切り替わり，そこから新たな反復の開始されることが観察される。

①文に初出の「小林一茶」「キノコを詠んだ俳句」は，②文で，一茶が詠んだ「毒きのこ」の句として繰り返される。また「①キノコ」（上位語）は「②毒きのこ」（下位語）に受け継がれ，さらに「③毒性」（「毒きのこの属性」）へとつながる。また俳句にある「②うつくしや美しや」は「③色の鮮やかなもの」とパラフレーズ[注5]される。つまり①文から③文に至るくり返しを見ると，色の鮮やかなキノコと毒性との関係が，一茶の句を手がかりに一層強調されていることが分かる。

ところが④文に「山梨県」「キノコ狩り」という新出語句が出現すると，一茶の句に関わる反復は姿を消し，代わって「キノコ狩り」の「キノコ」（省略形で反復）が同語反復を繰り返すようになる。省略形を（　）で示す。

まず④文の「④キノコ狩り」は，⑤文以降で，構成要素の「キノコ」が，「⑤（キノコが）採れた→⑥（キノコを）鑑定してもらう→⑥食べられるの（＝キノコ）は→⑦（キノコを）汁物にして→⑦秋の味覚（＝キノコ）」と，キノコが復元可能[注6]な語句として，省略形で同語反復を繰り返し，「キノコ狩り」のキノコを中心とする話題で一貫していることが確認される。なお「⑦秋の味覚」に至る流れを見ると，「⑥食べられる」キノコを中心とする話題であることは確かで，その背後にはキノコの毒性が意識されていることは明らかである。

なおキノコについては次のような流れが観察される。

〔①キノコ→②毒きのこ→③（キノコの）毒性→④キノコ狩り→⑤（キノコ）→⑥（キノコ）→⑦（キノコ）〕

⑧文に「森林総合研究所きのこ研究室」「根田仁・主任研究官」「日本」「名前」という新出語句の登場によって，きのこ狩り関係の反復は終了するが，キノコは「きのこ研究室」（構成要素の反復），「（日本の）キノコ」（同語反復）」

へと受け継がれる。

まず「⑧根田仁・主任研究官」は，「⑩根田さん」と同語反復し，根田研究官の談話を基にキノコの種類と毒性の説明が行われる。まず「名前」に関しては，「⑧約三千種」と種類を上げ，それを「⑨キノコの宝庫」とパラフレーズする。毒性については，「⑩色→⑩地味→⑩毒性→⑩色」など，色と毒性に関わる語句がくり返される。また「⑩毒性」から「⑪毒ではない」と，対義的関係語句の反復があり，「毒ではない」(上位語) から「⑪食用スギヒラタケ」(下位語)，「毒ではない」の類義語「⑪食用」と「⑫食べた」がくり返される。さらに「⑪食用スギヒラタケ」に関わる「⑪騒動」について，「⑫死亡した」「⑫疑われて」「⑬知識」「⑬用心」など，関連語句によるくり返しがある。

このように⑧文から⑬文にかけては，「⑧根田仁・主任研究官」を出発点に食用スギヒラタケをめぐる騒動まで，多様な語句のくり返しが観察される。キノコに関するくり返しを見ても分かるように，

〔⑧きのこ研究室→⑧日本のキノコ→⑧約三千種（＝キノコの種類）→⑨キノコの宝庫　→⑩（キノコの）色→⑩キノコの毒性→⑪毒ではない食用スギヒラタケ→⑫（スギヒラタケを）食べた→⑬（食用キノコへの）知識と用心〕

以上のように，同一語句による反復とは違い，関連語句や対義語句のくり返しは，話題を多角的に広げ，発展させていく上で有効に機能している。

ところが⑭文になると「日本企業」「ポイズン・ピル（毒薬)」という新出語句の登場に伴い，キノコに関わる語句の反復は完全に終わり，「⑭毒」はキノコから切り離され「⑭毒薬」の構成要素として繰り返されるのみである。

まず「日本企業」は，「⑭日本企業→⑱日本企業→⑲企業→⑳外国企業（対義語）→㉑日本企業→㉑日本の社長さん（下位語)」と，コラムの最後の一文まで繰り返される。また「ポイズン・ピル(毒薬)」に関しては，「⑭ポイズン・ピル（毒薬）→⑮株式買い占め→⑮株主→⑮新株→⑮買収者→⑮買い占め比率→⑯乗っ取りを防ぐ対抗策→⑰経済産業省→⑱株式→⑱買収の対象」など，同語，関連語句の反復を繰り返している。

このように⑭文から㉑文にかけては，新出語句の「日本企業」「ポイズン・ピル（毒薬)」を中心に反復が観察されるため，話題はこの二語を基軸に展開していくことがわかる。同語反復を基軸とするくり返し，関連語句や対義語を中心とするくり返しとは違い，二語を基軸とするくり返しでは，特に一つが同語反復をしている場合，二つの概念の関係性が明らかとなり，内容を確認しな

がら読みを進めていくことが可能となる。

コラムの最後の㉑文は，それまで観察されたくり返しとは様相を異にする。

まず「⑭日本企業」から始まる同語反復が㉑文で終了する。また「㉑日本企業」の関連で「㉑日本の社長さん」（下位語）が新出する。それらに対し「㉑美しい」「㉑一茶流」などの語句は，先行文と直接反復関係を持たず，特に「一茶流」は初出の語ではあるが，しかしこの二語は冒頭の「②うつくしやあら美しや」と「①小林一茶」を受けて，冒頭の語句を最後にくり返していると見なせるので，新出語句には当たらない。しかも，「㉑美しい日本企業には毒がある」は，一茶の句をパロディ風に表しており，いわば冒頭の②文のくり返しと見なせる。

このようにコラムの最後は，先行の叙述内容を引き継ぐ語句をくり返すと同時に，冒頭の語句を再びくり返し話題をとりまとめるという，展開部には見られないくり返しの方策が観察される。特に冒頭の語句を文章の最後に再びくり返す方策には，コラムを終了させる働きがある。

以上，コラム全体に渡り，くり返しの様相を観察してきた。冒頭部に観察される話題を強調する働き，展開部に見る同語反復，関連語句や対義語によるくり返し，初出の二語を基軸とするくり返しなど，話題に応じた様々のくり返しが観察された。また結尾部は，冒頭部や展開部のくり返しとは異なり，先行文からのくり返しと同時に冒頭の語句を繰り返すことで話題を終了させている。

なおここに紹介した例は，先行叙述に関わる語句の反復が新出語句の登場により姿を消し，話題を切り替えながら進めていく方式をとるコラムであるが，中には冒頭部に初出の語句が結尾部に至るまで繰り返され，一つの基調とする流れを形成しながら，順次それに関わる語句を新出させて話題を展開していくコラムもある。たとえば10月23日は，74歳で急逝した詩人の川崎洋さんを追悼する内容で，川崎さんの詩「なぜ」に始まり「なぜ」で終わっている。また10月24日は，最近都内の地下鉄の駅などで見かけなくなった「ゴミ箱」を話題にして，「ゴミ箱」で始まり「ゴミ箱」「ゴミ」で終わっている。このように，一貫した流れを形成しながら話題を進める機能も，くり返しには観察される。同語反復，類義語，対義語，上位語下位語，関連語句，パラフレーズなどによるくり返しは，話題を進める上で重要な働きをしていることが確認できたかと思う。

2.2　B話題の展開に関わる機能

2.2.1　b1話題をまとめ，新たな話題の展開を予告する機能

これに相当するのは，先行の叙述内容を，〔コ系＋語句〕の形式で捉え直す場合である。

例2　10月10日

①ドイツ・ケルン大学法学部のテッティンガー教授が二〇〇二年六月，慶応義塾大学で「安全の中の自由」と題して講演を行った。②教授は，安全の要素を思い切って強化することなしに，自由な秩序はもはや保持できないと語った◆③「安全がなければ，人間はその力を伸ばすことも，そこから果実を得ることもできない。なぜなら，安全なくして自由はないためである」。④十九世紀初期のドイツの政治家フンボルトの，このような言葉も紹介している◆⑤この講演から二年余が過ぎたが，テロや凶悪犯罪の脅威は，さらに増している。⑥教授の指摘を切実なものとして受け止める人も多いのではないだろうか

①文〜④文では，2002年6月に慶應義塾大学で開催されたケルン大学のテッティンガー教授の「安全の中の自由」と題する講演内容を紹介し，その後に⑤文でそれまでの叙述内容を，「この講演」と〔コ系＋語〕の形式で捉え直すことで，繰り返している。この捉え直しの後，本題である「テロや凶悪犯罪の脅威」に話題を進めている。

例3　10月11日

◆⑤「アジアの中の琉球」という視点に立ち，海外の学者と連携しながら先駆的な歴史研究に取り組んできた琉球大学教授，高良倉吉（たから・くらよし）さんに，国際交流基金から今年の国際交流奨励賞・日本研究賞が贈られた◆⑥琉球史は，豊かで多様だ。⑦江戸時代の薩摩藩による支配や沖縄戦，米国の統治など，被害者としての面ばかり強調していると，歴史のダイナミズムを見失ってしまう ——。⑧高良さんの持論だ◆⑨沖縄サミットの際には，日米同盟の安全保障上の役割を積極的に評価する共同論文「沖縄イニシアティブ」を発表し，地元で論争を巻き起こした。⑩沖縄の新潮流である◆⑪こうした基地に理解を示す人々も，米軍ヘリなどの相次ぐ事故には，強い

衝撃を受けている。

⑤文～⑩文までは，沖縄の歴史をダイナミズムに捉えようとする琉球大学教授高良倉吉さんの活動を紹介し，その活動を「⑩沖縄の新潮流」と位置づけ，⑪文で「こうした基地に理解を示す人々」と，〔コ系＋語句〕の形式で捉え直す。この捉え直しによるくり返しは，「沖縄の新潮流」が何を意味するのか，高良倉吉さんの活動をどういう目的で取り上げたのか，先行叙述内容の意味を明らかにする働きがある。従って読者はその意味を確認して先へ読み進めることが可能となる。この捉え直しの後，本題である「米軍ヘリなどの相次ぐ事故」へと，話題が発展していく点を考慮すると，まずこの捉え直しの部分に読者の注意を向けさせ，重要なテーマがあることを読者に認識させる意図がある。

正保勇（S56・S62）は，コ系が使われる場合として6種類を上げているが，そのうち参考になるのは，次の2点である。

A　情報の焦点となるものは，「コ」で指示されることが多い。
B　ある文のテーマ（主に主語）が，その直前の文またはパラグラフを受けているような場（筆者注・「合」が略されている），このテーマには「コ」が使用されるのが普通である。

「この講演」「こうした基地に理解を示す人々」と，コ系を用いて要約することで，ここに情報の焦点があり，テーマに関わる部分であることを読者に注意を喚起し，内容を確認させることが出来る。コ系による捉え直しの後，本題が持ち出されている点を考慮すると，コ系による捉え直しは，いわば新たな話題の展開，本題の提示を予告する働きをしている部分と見なすことが出来る。

2.2.2　b 2話題をまとめ，強調する機能

これに相当するのは，比喩表現による先行の叙述内容の捉え直しである。

例4　10月20日

⑪新潟市発注の公共工事を巡る官製談合事件で，市の幹部職員が逮捕された。⑫設計額を業者に漏らしていたという。⑬昨年一月施行の官製談合防止法に絡み，初めて「官の声」の刑事責任が問われることになる。◆⑭談合は，割高の商品・サービスを税金で買わせる。納税者の懐から幾らかずつ金をかす

め取るに等しい。⑮監視する立場の役人が「麦わら」を握っていては，猫に魚の番をさせているのと変わらない

本コラムは，明治の初期モースが見た，四人の人力車夫が「長さの違う麦わら」でくじを引く光景をエピソード風に紹介したあと，本題の新潟市で発生した官製談合事件を批判するという内容である。⑪文～⑭文までは，官製談合事件の概要を説明し，そのあと⑮文で先行の叙述内容を「監視する立場の役人が『麦わら』を握っていては，猫に魚の番をさせているのと変わらない」と比喩を用いて捉え直している。

例5　10月27日

①目，耳，口の自由を二歳で失ったヘレン・ケラーが最初に覚えた言葉は「水」であったという。②サリバン先生がヘレンの左手に井戸水をかけ，右の手のひらに指で「W…A…T…E…R」と書いた◆③それが，「私の手を流れる，すばらしい，冷たい何か」についた名前であることを知る。④水が魂を目覚めさせ，「光と希望」を与えてくれたと，自伝で回想している

……

◆⑪被災地には冷たい雨が降りつづく。⑫地盤が緩めば，余震が新たな土砂災害につながりかねない。⑬全村に避難指示が出た山古志村では，倒壊をまぬかれた家屋にも水没の危険が迫っているという。⑭魂を「闇と絶望」で濡（ぬ）らす非情な水もある。

本コラムは，ヘレンケラーのエピソードで始まり，10月23日に発生した新潟県中越地震の被災地を襲う非情な水で締め括っている内容である。⑪文～⑬文までは，「⑪冷たい雨」「⑫土砂災害」「⑬水没の危険」と，被災者が現実に直面する水のもたらす危険性を関連語句で反復した後，それらを⑭文「魂を『闇と絶望』で濡（ぬ）らす非情な水」と比喩で捉え直し，水の怖さを強調している。しかも⑭文の比喩は，冒頭部にあるヘレンケラーの「魂を目覚めさせ「光と希望」を与えてくれた水」とは対義的関係になっており，後述の「2.3.1 c 1対立の図式を鮮明にして終了させる機能」に相当するため，「魂を…非情な水」のイメージは，読者に強いインパクトを与えることになる。

中村明（1991）は，「比喩法」を「表現対象を他のなかに置き換える過程をとおして伝達する修辞的な言語操作」と定義し，その目的として「相手にわか

りやすいようにするためとか，そのことを強めるためとか，表現の単調さを回避し叙述に変化をつけるためとか」を挙げている。

ここに例示した談合事件，地震，水害などの災害は，そのこと自体は重要な意味を持つとしても，現実を見回せば似たような事件，災害は枚挙に暇がないほどである。そのためこの種の事件などを扱う叙述は，ややもすれば単調に紋切り型となる嫌いがある。それを回避するには比喩による置き換えは効果的であり，「猫に魚の番を…」「魂を『闇と絶望』で濡（ぬ）らす…」などと，先行の叙述内容を比喩に置き換えてまとめると，インパクト与える働きが出てくると考えられる。

2.3　C話題を終了させる機能

2.3.1　c 1 対立の図式を鮮明にして終了させる機能

冒頭部または展開部に出現する語句とは対義的関係にある語句が結尾部に至って繰り返されることがある。これに該当するコラムはまず冒頭部で，批判の対象とする時事問題とは対極に位置する事柄を取り上げ，プラス評価の印象を与えた後，いよいよ本題とする事件を取り上げ，それを批評するという展開方式において顕著に見られる。

例 6　10月20日

①米国の動物学者エドワード・モースは東京の街で，四人の人力車夫がたむろする場所に歩み寄った。②明治の初めである。③米国の辻（つじ）馬車屋がするように客を奪い合うかと思えば，しない◆④長さの違う麦わらで，くじを引いた。⑤「運のいい一人が私をのせて停車場へ行くようになっても，他の三人は何らいやな感情を示さなかった」(平凡社「日本その日その日」)。⑥争いを好まない日本人の，穏やかな心根と映ったらしい

……

13昨年一月施行の官製談合防止法に絡み，初めて「官の声」の刑事責任が問われることになる。◆⑭談合は，割高の商品・サービスを税金で買わせる。納税者の懐から幾らかずつ金をかすめ取るに等しい。⑮監視する立場の役人が「麦わら」を握っていては，猫に魚の番をさせているのと変わらない◆⑯「穏やかな心根」が，税金を食い物にして恥じない「卑しい心根」に変わっていったのは，いつごろだろう。⑰「明治は遠くなりにけり」とモース先生

の声が聞こえる。

先述（例4参照）したように，本コラムは，明治初期エドワード・モースの目に映った，仲間内で仕事を融通し合う人力車夫の「穏やかな心根」のエピソードから始まり，新潟市で発生した官製談合事件の当事者達に見る「卑しい心根」を批判して終わる内容である。

ここでは冒頭部に出現する「①エドワード・モース」「②明治の初め」「⑥穏やかな心根」などの語句は，結尾部に至って「⑰モース先生の声」「⑰明治は遠くなりにけり」「⑯穏やかな心根」「⑯卑しい心根」として再び登場し，冒頭部の語句を結尾部で繰り返す形となっている。「モース」は同語反復だが，「明治の初め」と「明治は遠くなりにけり」とは対義的関係，「穏やかな心根」と「卑しい心根」も対義的関係にある。

「⑰モース」の場合は，冒頭部の繰り返しと同時に，「⑰モースの声」と「⑬官の声」とが対立してもいる。ここで言う「官の声」とは，すなわち「⑮監視する立場の役人」であり，逮捕された事件の当事者を指しているため，「モース先生の声」は，不正に対する不正を見抜く良識者の声と解することも出来る。事実，モース先生は，本コラムで，明治初期の日本人の生活を具に観察し，それを記録に残した人物として紹介されているため，ここでは現代の役人の心根を見抜く観察者として位置づけられていると言えよう。

このように結尾部に対義的関係にある語句が出現すると，「官の声」対「モース先生の声」，「明治の初め」対「明治は遠くなりにけり」，「穏やかな心根」対「卑しい心根」という，対立の図式が鮮明になってくる。従って結尾部に観察される対義的語句の反復は，対立の図式を鮮明にして，読者に批判の対象を強く印象づける機能を担っていると考えられる。

2.3.2 c 2話題を再確認して終了させる機能

冒頭部（または展開部）に出現する語句が，結尾部で再び繰り返されることがある。これらの語句には話題を再確認し強調する機能が観察される。

次ぎに示す例は，冒頭部で過去の出来事の一場面を紹介し，結尾部に至って今度は未来の場面を過去に重ね合わせて再び繰り返す展開方式をとるものである。

例7　10月2日

①私立探偵フィリップ・マーロウは，強打者ジョー・ディマジオが今日もヒットを打ったかどうか，そればかり気にしている。②米国映画「さらば愛（いと）しき女よ」（一九七五年）◆③ディマジオは一九四一年に五十六試合連続安打の金字塔を打ち立てた。④レイモンド・チャンドラーの原作にディマジオの名は見えないが，大記録へ歩むひと足ずつに全米が気もそぞろだった当時の世相を映画は伝えている◆⑤全米と日本じゅうがいま，マーロウだらけだろう。

……

◆⑬「イチローはきょう，何本打った？」。⑭二〇〇四年を舞台にした映画のなかで登場人物がそう尋ねるせりふを，いつの日にか聞けるかも知れない。

本コラムでは，日米双方のファンが熱い視線で見守るイチロー選手の記録達成への期待を話題にしているが，冒頭部は1941年を舞台とする米国映画の一場面，結尾部は2004年を舞台とする未来の映画の一場面を想定したものである。

①文～④文までと⑬文～⑭文までを見ると，前半と後半はともにヒットを気にする映画の一場面という共通点があり，人物と時代を入れ替えて後半で同じような場面を繰り返していることが分かる。「①私立探偵フィリップ・マーロウ」は「⑭登場人物」に，「①強打者ジョー・ディマジオ」は「⑬イチロー」に，「③一九四一年」は「⑭二〇〇四年」に変わるが，「①今日もヒットを打ったかどうか」は「きょう，何本打った？」の科白に変わるだけで，同じことを気にする点では共通している。

このように冒頭部を結尾部で繰り返すと，話題の再確認という働きが観察されるが，同時に類似する映画の一場面を繰り返すことで，イチロー選手を，米国野球史上大記録を達成したディマジオに重ねることになり，結果的にイチローを，ディマジオに匹敵する程の，米野球界に名を残す偉業を達成しようとしている選手であることを読者に強く印象づけることができる。

例8　10月1日

①買った本を開いたとき，製本で切り損ねたのだろう，余分な紙を折り畳んだ不体裁なページに出くわすことがある。②この裁断ミスのページを「福紙（ふくがみ）」という◆③辞書にも載っている言葉で，日本国語大辞典（小学館）には「紙を重ねて裁つ時，折れ込んだりして裁ち残しのある紙」とあ

る。④商品の欠陥部分を指すにしては妙に縁起のいい名称だが，陰暦十月の呼び名「神無月」に関係があるらしい

……

◆⑩土砂崩れと浸水の傷跡が残る被災地には，「読書の秋」も「灯火親しむ…」もないだろう。⑪灯下，心静かに書物をひらくことのできる人にとっては，どのページも身の幸福をかみしめる「福紙」であると，しみじみ思う。

本コラムは，福紙という裁断ミスのページを切り口に，10月の読書週間を台風が大暴れした今年の気象現象と絡ませて話題としたものである。冒頭部では「福紙」命名の由来が説明されるが，「福紙」が再び登場するのは結尾部に至ってからである。

〔反復図1〕を見ると話題の展開が把握しやすいが，「①本」と「⑪書物」(類義語)，「①開く」と「⑪ひらく」，「①ページ」と「⑪どのページ」，「②福紙」と「⑪福紙」というように，冒頭の語句が結尾に至って同語，類義語で繰り返され対応している。

このような冒頭部の語句が結尾部で同語反復により繰り返されるパターンは，「編集手帳」の場合，少なからず観察される。次ぎに例を上げる。なお下線はコラムの最後の文番号を示す。

10月4日「②偽造犯」と「⑳偽造犯」，
10月6日「①熊の親切」と「⑭熊の親切」，
10月9日「①数寄屋橋」と「⑫数寄屋橋」，
10月14日「①人工降雨」と「⑪「人工」」，
10月17日「①生きる力を与えてくれるような歌」と「⑫この歌」
「③竹花豊さん」と「⑫竹花さん」，
10月19日「虹」と「⑰虹の「君」」
10月20日「①動物学者エドワード・モース」と「⑰モース先生の声」，
10月26日「②曲亭馬琴」と「⑮馬琴」，
10月28日「①命」と「⑪小さな命」，
10月31日「①小林一茶」と「㉑一茶流」

同語を繰り返す例が一ヶ月のうちほぼ3分の1を占めている点から判断すると，これはコラムに見る典型的な話題を終了させる方法と見ていいかと思う。同語反復をとることで，冒頭の書き出しで提示した話題をもう一度最後に改め

〔反復図１〕

	〔本〕	〔開く〕	〔ページ〕	〔開紙〕	〔辞書〕	〔十月〕	〔福神〕	〔残る〕	〔読書〕	〔韓愈〕	〔詩句〕	〔台風〕
①	本	開く	余分…ページ									
	製本											
②			裁断…ページ	福紙								
③				紙…裁ち残し…紙	辞書							
					言葉							
					日国大							
④			商品…陥部分		名称	陰暦十月						
					呼び名	神無月						
⑤						十月	神々	集まる				
							出雲大社	残る				
							恵比須さま					
⑥							旅立…福の神	残る				
				裁ち残る紙	しゃれ		立ち残る神					
⑦						月末			読書週間	詩人韓愈	詩句	
						十月			読書の季節		「灯火…親しむ」	
⑧										韓愈	同じ詩	
											秋　積雨　はれ	
⑨						十月の声					積雨　上がる	台風　大暴れ
⑩								残る	読書の秋		(秋)「灯火親しむ…」	土砂崩れ
												浸水の傷跡
												被災地
⑪	書物	ひらく	どのページ	福紙			身の幸福				灯下	

て確認させることが出来るし，読者に印象に残る形で強調することが可能となる。

3　むすび

文章に観察されるくり返しには，文章を展開させる方策として，冒頭部から結尾部に至るまで様々の機能を発揮させながら多用されていることが分かった。特に結尾部に見る話題を終了させる機能として，冒頭の語句との同語反復，対義語による反復などが観察されたが，これはコラムの展開方式を検討する上で参考になる結果であったと思う。

今まで拙稿で幾つか語句の反復を取り上げてきたが，今回機能面に注目して考察したことで，話題の展開に同語反復，対義語，関連語句等によるくり返しがどのように関わってくるのか，すこしばかり問題の方向が見えてきたように思う。

今後，今回の結果を踏まえ，さらに詳細にコラムを検討し，反復の機能を整理したいと考えている。

〔注1〕安藤貞雄1997「訳者のことば」(M.A.K.ハリディ／ルカイヤ・ハサン著安藤貞雄他訳1997『テクストはどのように構成されるか』ひつじ書房　ii頁)

〔注2〕注1の416頁，418頁

〔注3〕塩澤和子2004「コラムの文章構造」『文藝言語研究』45　筑波大学　文芸言語学系

〔注4〕10月1日～10月31日の一ヶ月間でわずか3例が確認されたにすぎない。

10月21日

◆この年月，死者の霊が慰められる日はなかっただろう。「慎重に裏付け捜査を進め，結果的に長引いた」と警察は言う。事件か否か，見極めの難しい事例であったのは分かる。さりながら◆寒さの募る一夜，俳人中村汀女はわが子の眠る床を引き寄せ，その軽さに胸を突かれた。

10月28日

◆病人を看（み）取りながら，あるいは出産を見守りながら，誰しも一度は神仏の前に　ひざまずいた経験があるだろう。

10月31日

◆山梨県にキノコ狩りに出かけた。一時間ほどでスーパーの袋いっぱい採れた。地元の人に鑑定してもらうと，食べられるのは一割にも満たなかった。それでも，汁物にして　秋の味覚を楽しんだ

〔注５〕R.de ボウグランド／W.ドレスラー共著池上嘉彦他共訳（1984）『テクスト言語学』（紀伊国屋書店76頁）に「パラフレーズは，表現を変えての意味内容の反復生起である」とある。

〔注６〕久野暲（1978）は，「省略」に関して，次の２点を挙げる。（８頁，10頁）

・省略の根本原則　省略されるべき要素は，言語的或いは非言語的文脈から，復元可能（recoverable）でなければならない。

・先行文脈による可復元性　通常，縮小・省略形は，フル・フォームが何であるかを，聞き手が先行文脈から推定できると，話し手が仮定した時のみ，使用可能である。

ここでは「キノコ」が省略されていることを，先行文脈から推定することができる。

［参考文献］

１．久野暲1978『談話の文法』大修館書店

２．佐久間まゆみ1992「接続表現の文脈展開機能」『紀要文学部』41日本女子大学

３．中田智子1992「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告104　研究報告集13』秀英出版

４．中村明1991『日本語レトリックの体系』岩波書店

５．林四郎1987「文の承接に伴う語の意味の展開」『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院

６．牧野成一1980『くりかえしの文法』大修館書店